

# 完全主義と抑うつに関連について

—バウムテストの幹と枝の処理に着目して—

16009PCM 高木真理

## 問題と目的

完全主義と抑うつに関連についてこれまで多くの研究が行われてきた。完全主義には、少なくとも二つ以上の下位側面が存在することが示されている(桜井・大谷, 1997)が、これらの各下位側面の果たす役割について一致した結果は得られていない。例えば、辻(1992)の完全主義尺度においては、失敗恐怖の全項目が抑うつと有意な相関を示したのに対して、理想追求は1項目のみが有意であり、強迫的努力は全ての項目が抑うつと無相関であった。これについて福井・山下(2002)は、完全主義が抑うつと一貫した結果が得られないことの要因として完全主義尺度では測ることのできない、パーソナリティ特性の差が影響していることを示唆している。また、“ストレスには、単なる自覚症状を超えるモデルの必要もあり、主観的な体験だけにこだわるべきではないだろう”との指摘がある(田尾雅夫・久保真人, 1996)。そこで、本研究では、完全主義と抑うつに関連を検討するとともに、質問紙だけでは測れない、無意識的な心の世界の有様、さらにはパーソナリティの諸傾向などについて、本人の自覚していないところで非意図的に表現しているものを映し出す手段として位置づけられている(小川, 2008)投影法を合わせて検討することとした。その中でも、クライアントへの脅威となりにくく、絵を一見するだけである本質を直感しうる可能性が拓かれている(山中, 1980)などの特徴から、多くの臨床現場で用いられているバウムテストを用いて研究を行うこととした。

## 方法

**対象**：医療法人 A 病院職員のうち、研究協力依頼を承諾し、回答に欠損のみられなかった男性 58 名(平均年齢 36.6 歳±11.7)、女性 173 名(平均年齢 43.2 歳±11.3) の計 231 名を分析の対

象とした。職種は介護、看護、事務、作業療法士などであった。

**手続き**：A 病院総務課を通して、質問紙と A4 サイズのケント紙、4B の鉛筆を配布した。消しゴムは各自使用可能であった。記入後は本人が封緘し回収した。

**質問紙の構成**：フェイスシート、自己志向的完全主義尺度(福井・山下, 2012)、CES-D 日本語版(島・鹿野・北村・浅井, 1985)

**バウムテスト**：A4 サイズのケント紙と 4B の鉛筆を用意し、教示は紙面上にて「実のなる木を描いてください」とした。分類は、「幹と枝の処理」に着目し、幹閉鎖・枝あり、幹開放・枝なし、幹開放・枝ありの 3 群とした。なお、幹が枝に分岐しているものを幹閉鎖とし、幹が枝に分岐していないものを幹開放とした。また本研究では、用紙から飛び出している幹と枝の処理が確認できないものや、樹冠によって幹が覆われていて幹と枝の処理が確認できないもの、一線幹のものは分析対象外とした。

## 結果と考察

「抑うつ」を従属変数として、「不完全性と失敗への恐れ」の高群、低群の 2 群と「幹と枝の処理」の 3 群間で二要因の分散分析を行った結果、交互作用は認められず( $F(2,225) = 0.279, ns$ )、「不完全性と失敗への恐れ」の主効果のみが見られた( $F(1,225) = 28.11, p < .001$ )。続いて多重比較を行った結果、「幹と枝の処理」の 3 群いずれにおいても「不完全性と失敗への恐れ」の高群の方が低群より「抑うつ」が高いことが示された ( $F(1,225) = 16.600, p < .001$ ;  $F(1,225) = 10.820, p < .05$ ;  $F(1,225) = 4.660, p < .05$ )。これは、「不完全性と失敗への恐れ」がその他の要因の影響を受けず、不適応を促進する可能性があるとの福井・山下(2012)と同様の結果が得られたといえる。

表1 不完全性と失敗への恐れと幹と枝の処理の二要因分散分析結果

変動因	平方和	自由度	平均平方	F	p
不完全性と失敗への恐れ	1306.120	1	1306.120	28.109	$p < .001$
幹と枝の処理	22.647	2	11.323	0.244	ns
完全性と失敗への恐れ×幹と枝の	25.962	2	12.981	12.981	ns
誤差	10454.948	225	46.466		
全体		231			

また、「抑うつ」を従属変数として、「完全性と理想の追求」の高群、低群の2群と「幹と枝の処理」の3群間で二要因の分散分析を行った結果、交互作用が有意であった ( $F(2,225) = 5.85, p < .01$ )。続いて、単純主効果の検定を行ったところ、幹閉鎖・枝あり群と幹開放・枝なし群では、完全性と理想の追求高群の方が低群より抑うつが高いことが示された ( $F(1,225) = 4.217, p < .05$ ;  $F(1,225) = 6.71, p < .05$ )。その一方で、幹開放・枝あり群においては、完全性と理想の追求高群の方が低群より抑うつが低いことが示された ( $F(1,225) = 3.91, p < .05$ )。

表2 完全性と理想の追求と幹と枝の処理の二要因分散分析結果

変動因	平方和	自由度	平均平方	F	p
完全性と理想の追求	82.313	1	82.313	1.653	ns
幹と枝の処理	44.611	2	22.306	0.448	ns
完全性と理想の追求×幹と枝の処理	582.324	2	291.162	5.846	$p < .01$
誤差	11206.718	225	49.808		
全体	28016.000	231			

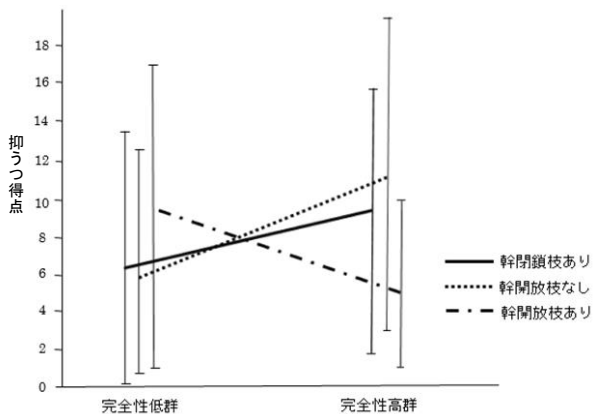


図1 完全性と理想の追求と幹と枝の処理の二要因分散分析。

バウムテストの幹は、本能や衝動のすべてを象徴している (Bolander, 高橋訳 2007) と言われており、枝は思考様式や創造的な自己表現の様式を示し (Bolander, 高橋訳 2007)、意識化された思考・情緒である。このことから、幹と枝の繋がりや思考と情緒の円滑さや、衝動性の統制だと解釈できる。つまり、幹閉鎖・枝あり群は、自覚された情緒に基づく思考ができる者

であり、幹開放・枝なし群は、自分の情緒の自覚に乏しい者であり、幹開放・枝あり群は、思考と情緒が繋がっていない者であると考えられる。

幹閉鎖・枝あり群の中で、「完全性と理想の追求」が高い者は抑うつ得点が高く、バウムテストにおいても、先行研究において抑うつ状態の指標である「小さい樹木」や、「幹の太さ」が極端に細いなどの指標が明らかに認められた。よって、幹閉鎖・枝あり群はやはり情緒に基づく思考ができることが示された。

幹開放・枝なし群は、「完全性と理想の追求」が高い者は抑うつ得点が高く、バウムテストでは、「用紙を横に使用する」や「実が多く描かれている」などの自己愛的な指標が多く認められた。伊藤(2004)において、「不合理な信念や自己愛といった不適切な動機に基づく完全主義の高い群では、適応的であるはずの高い目標を設定することは、精神的に不健康である」と述べられていることと同様の結果が得られたと考えられる。つまり、枝が無いと言うのは何にでもなり得る、いわば未分化な全能性の象徴であるという山中(2005)の考えを支持する結果となった。

幹開放枝あり群は、「完全性と理想の追求」高群において抑うつ得点が低くなり、「完全性と理想の追求」の低群において「抑うつ」得点が高くなった。これは、枝と幹のつながりの欠如は、意思と行為の隔たりや、自然な感情を生きていない (Castilla, 阿部訳, 2002) とあるように、情緒の自覚の乏しさからくる結果だと考えられる。

以上の結果から、「抑うつ」得点が低い者の中には完全主義も低く本当に適応的な者と、完全主義が高いのに抑うつを示さない情緒の自覚に乏しい者が含まれていると考えられる。しかし、これはメンタルヘルス対策としてうつ病のスクリーニングとして抑うつ得点のみ算出していたのでは気付かれない点である。よって、今後職場におけるうつ病のスクリーニングを行う際には、投影法も併せた他覚的なパーソナリティ特性の差も考慮して行う必要性が示唆された。

なお、本研究は、愛知淑徳大学大学院心理医療科学研究科倫理委員会での承認を得て行った。